広島芸術学会活動報告

令和二（二〇二〇）年七月一日～令和三（二〇二一）年六月三十日

▼令和二年八月二十二日

会報第一五七号を発行。

▼令和二年九月五日

広島県立美術館講堂において、令和二年度総会、第一三〇回例会（当初、前年度三月十五日に広島大学・東広島キャンパスで開催予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響のため、このように変更）、および第三四回大会を開催した。総会参加者数は十九名、例会参加者数は二十二名、大会参加者数は二十四名。

令和二年度総会は、関村誠事務局長の開会のことば、青木孝夫会長の挨拶の後、大島徹也を議長に選出し議事を進めた。まず、第一号議案「令和元年度事業報告並びに決算について」について、資料にもとづき事業報告および決算報告が関村事務局長からなされ、続いて、樋口聡監査および船田奇岑監査による監査の報告が船田監査よりなされ、審議の結果、承認された。次に、第二号議案「令和二年度事業計画並びに予算案について」について、資料にもとづき事業計画および予算案が関村事務局長から説明され、審議の結果、承認された。最後に、第三号議案「委員選挙および令和二・三年度役員について」は、まず令和二年度はじめに実施された委員選挙の結果と会長・副会長の選任等について、関村事務局長から報告がなされた。選挙により選出された委員は青木孝夫、伊藤由紀子、今井みはる、大島徹也、柿木伸之、桑島秀樹、城市真理子、関村誠、馬場有里子、山下寿水の十名（五十音順）で、これらの委員の互選により、青木孝夫が会長に、伊藤由紀子が副会長に就任した。その後、会長が指名し総会による承認を必要とする委員五名には石松紀子、岡田陽子、隅川明宏、西原大輔、福田道宏（五十音順）、委員会が選出し総会による承認を必要とする監査二名には船田奇岑、古谷可由（五十音順）が選ばれたことが関村事務局長から報告され、審議の結果、承認された。また、会長が指名する幹事に片山俊宏、山本和毅の二名（五十音順）、事務局長に関村誠、事務局員に石松紀子、馬場有里子が就任したことが関村事務局長から報告された。すべての議事審議が終了後、青木会長の挨拶があり、閉会した。

第一三〇回例会は、研究発表（二件）を行った。研究発表は、①石橋健太郎（広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期）「内裏御所の床の間を飾った芸術的営為としての「いけばな」――『言國卿記』の記事を中心に――」、②山本美咲（広島市立大学 元協力研究員）「作品鑑賞と救済についての考察―アンリ芸術論より」。

第三四回大会は、研究発表（二件）を行った。研究発表は、①

林淳（広島大学大学院総合科学研究科博士後期課程）「井島勉の現代書思想――伝統的な書に対する問題点を中心に」、②河野ななみ（広島市役所 学芸員）「狩野松栄の画風について――狩野松栄筆《花鳥人物図》を中心に――」。

▼令和二年十月一日付で「藝術研究 2020」（年報第三十三号）を発行した。

▼令和二年十一月十七日

会報第一五八号を発行。

▼令和二年十二月九日

会報第一五九号を発行。

▼令和二年十二月二十日

第一三一回例会を開催した（ウェブ会議システム Zoom を用いたオンラインによる開催）。特別報告として山下寿水（広島県立美術館）「コロナ禍での広島県立美術館の模索――戦後75年の自主企画を中心に」、研究発表として、柿木伸之（広島市立大学）「嘆きの系譜学――うたの美学のために」。参加者数は二十八名。

▼令和三年二月二十日

会報第一六〇号を発行。

▼令和三年三月七日

第一三二回例会を開催した（ウェブ会議システム Zoom を用いたオンラインによる開催）。第一部は、青木孝夫教授の最終講義（広島大学退職記念）「日本の美学、東アジアの芸術観」〔主催：広島大学総合科学部及び大学院人間社会科学研究科人間総合科学プログラム教員有志（発起人：桑島、関村）、広島大学人間文化研究会、共催：広島芸術学会〕。第二部の研究発表は、多田羅多起子（広島大学）「作品調査の記録をたどる――土居次義によるモレッリ法の応用――」。参加者数は五十九名。

▼令和三年三月十六日～二十一日

第一二回芸術展示〈制作と思考〉「Sweet Home――家庭の美学」を開催した。広島県立美術館県民ギャラリーを会場とした。総入場者数は四百四名。詳細は別掲の報告のとおり。

◆会員状況

令和三年六月三十日現在、法人会員二法人、個人会員二百名（一般会員百三十七名、学生会員六十三名）

※文中、当学会会員については敬称を略させていただきました。また、肩書きは当時のものです。

事務局